

路上文芸総合雑誌『露（Rojuku）宿』

2001年2月25日発行



定価500円

表紙写真	亀山 亮	
文中写真	岡田知子	
路上讃歌	富士森和行	2
悔恨	清翠	3
22才	只野酔払	4
短歌	いわせまさと	5
無題	橘 安純	
陽だまり19	秋戸 空	6
川柳	小一	7
生きる	新城秋男	
「めぐりあい」ほか	マツ	8
入院日記	Yさん	
無題	Kさん	
詩二編「白銀の夢」ほか	土屋 太	9
太陽の宮殿	鈴木克彦	11
凧の子守唄	弓削鴻介	14
エロスの廃園	望月大成	15
ロダン	只野酔払	19
無題	なかまより	21
朝太郎の箱船	鈴木克彦	25
湊町より	高橋美香	27
東京路上ふらり散歩	笠井和明	28
	岡田 知子	
アイルランドからの手紙	恩田美代子	35
読者のページ		36
はり師いが丸の肝心かなめ	はり師いが丸	37
編集後記		38

表紙写真・メキシコモアパス州のインデオの女の子
 コーヒーは唯一の現金収入だ。この近くの村で（アクテアル
 村）右翼組織による虐殺が起こり、村民は自分の畑に行けな
 い状態が続いている。NGOによる救援物資にたよらなければ
 生活がむずかしい。（亀山 亮）

路上讃歌 十五首

富士森和行

路上誌の意図^{こゝろ}ほのぼの萌えそむる新らしき世の春の雪解け
還へり来し世紀の初めふりにしも根雪は尚もなに見据^すへおり
心のケアより頼む神の在^{おわ}さむに何ためらへり路上の魂
初雪を被^{かぶ}りつ、ゆく夜の坂灯る明りの示唆^{しき}が耀^{かや}く
独り居の窓に春めく朝毎の光^ひに透きて立つ余生の埃^{ほこ}り
さ、やかに鏡開きの餅わりて今日のいのちを孤り噛^かみしむ
稽古始めの武道の響き勇しき若きらの直^すぐなる世をば想へり

(一月八日、成人の日、武道館にて)

春立つ日近き且ては路頭をば迷ひし時も在りしかと思ふ
救われて欲しと願ふは吾ればかりかは今ぞいのちの曙^{あけぼの}なれば
路上には春の飾りはなけれどもこゝろに飾^{かざ}れおのおの、春
神よりの愛の管理にある処いきいきとして甦^{よみが}へりをり
一壘^{びん}の老いを支ふるアリナミン空^{から}になりつ、冬恙^つがなし
まざまざと初夢ならぬ現^{うつ}にぞ路上の命の救われし見る
わが窓の健気^{けなげ}なるかもシクラメン白く楚々たるを鑑^{かん}みの如く
心充^{みた}すレベルとなりて路上誌の春を讃^たふる時こそくらむ

(新世紀、一月中旬 自宅にて)



悔恨

清翠

私が、東京へ上京したのは、昭和51年の桜の花
咲きみだれる5月頃の事でした。

学問、地位、もない私は、全国各地で、様々
な仕事をしてきました。

時は流れ、いつしか、故里をわすれさり、年
を重ねるたび事に、身体の場合もわるくなる一
方、わすれていた故里をたづねる心がめばえた
のでした。

そして、いてもたってもいられず深夜高速バ
スに東京駅からとびのり、一路わすれかけてい
た故里へと高速バスは走っていました。

バスの中は、故郷へ帰る人、旅を目的にした
人、様々な人々が皆それぞれ、酒を飲んでい
る人達。私は唯々感情がたかぶってねる事も
できずに真暗な、時おり街の灯りが流れゆく窓
の外を見つめ、故里へ到着の時間をまちわびて
いました。

故里へバスが入るころは、夜が、すこしづつ
明け、ちょうど地平線のかなたから太陽が登り
つつ、バスから見る景色がまぶしく私の目にう
つりました。

何年ぶりだろうか、父さん、母さん達、無事
だろうか。

とおもっているうちに、目的地へバスは到着
しました。

私は、当時、生れ育った故里から家出をして
都会へ旅立ってから数えてみました、30年も経
ってしまいましたので、家も、そのままだとばかり
におもっていました。

私は、私の家をさがしました。家はなかなか
見つからず、何だかいやなよかんがしました。

やっとのことで家をさがしあてました。両親
に何といて詫びていいか、玄関の前に立って
考えました。すると、中から、ガラス張の戸が
あき、見知らぬ女の人が出てきて、私の顔をもの
めずらしそうに見つめ、居間の方にむかって
「あんた、誰れか、お客さんですよ」と言っ
て、女の人が家からでていきました。

何と奥の方から60—65才位の男がでてきたと
おもいきや私は、おもいつき頭をなぐられ

「何で帰ってきた、おまえは死んだものとお
もっていた」……

私は「両親は元気か」と聞いてみた。

「おまえは家にはいることが今さらできるか」
と、言われ私は心の中から私自身を恥じていた
と、その時外から帰ってきたのは、私の兄嫁だ
ったのです。私は家にも入れてもらえず、兄貴
が言った寺へと行ったのです。

そこで見たのは、両親のねむる墓でした。

私は、そこで大声をだして、泣きました。し
まん、しまんと、泣きに、泣きました。

ぬけがらのようになった私を和尚が本堂へ連
れて行って、私の家の出来事等を話してくれま

した。私は心でおもった。来るんでなかったと。
私は和尚に言っ、両親の供養をしてもらい、
もう二度死んでも帰るものかと、心に決心し、
故里をあとにしました。

人間って、悲しいね、悔しいね、生きてい
くためにちょっとした事で成功する人、いくらが
んばっても失敗をくりかえす人、生きていくた
めに、どうしても通らねばならない道、その人
生がいやなら、命をたてばいいんだものね。

寒いよね、手足が冷たいよね、冬ともなれば
しんと冷えこんでくるよね。何かの温くも
りがほしいよね。路地裏の赤ちょうちんの灯り、
家々のほのぼのとした灯りの温もり、ほしいよ
ね。

寒々とした心の中に私は「露宿」という雑誌
を知り、心の中に仲間の温もりを知った。これ
からの人生、新世紀を迎え、私自身、本年こそ、
悔いのない年にしたいとおもいます。

今回、10号露宿に投稿お便りくださった全国
の皆さん本年も健康第一の年でありますように。

短歌

旅に出ておよぐ世間の荒波に

耐えて忍んで飛びたつカモメ

新しき世紀に望む除夜の鐘

しばれる夜に星の輝がやき

幾度の試練の季節のりこえて

夜月に浮かぶ冬ばたんかな

22才

只野酔払

マー君は死んだ
寒い寒い朝だった
地下鉄に身を投げた
あと75日で22才になれたのに

小学2年の時
札幌から横浜に来た
新しいお母さんが羽田にいた
顔一杯笑っていた

中学1年の時
少年少女囲碁大会で
神奈川県代表になった
碁を憶えたのは
中学1年の4月だった
4ヶ月で四段になった

朝礼の時、全校生の前で
校長先生から

「全国大会頑張れ」と激励されたこと
嬉しそうに話していた

8月の全国大会は一回戦で負けた

マー君は薬を飲んで自殺をはかった
夏休みが終った9月の中頃だった
右腕が使えなくなった

それから

精神病院生活が始った
幾度となく繰り返し返された自殺
生と死をさまよっていた
そんな五年が過ぎた

退院して
やがて
身体障害者職業訓練校に入学した

絵が好きだった
ギターが好きだった
囲碁が好きだった

左手一本だって
生きていけると笑っていたのに
それは突然の事だった
二人で酒を飲んだのに
父より早く逝くなんて

マー君の夢は何だった
マー君の探していたものは何だった
マー君は死ぬ事ばかり考えていた
いつまで経っても22才になれない
10年経っても22才を知らない

12・10・17

短歌

いわせまさと

いつよりか願ひも枯れし人夫吾

あぶれ避けんと（親方の）娘にへつらふ

願ひなどもつはむなしき吾が生活

あきらめきれぬ妻子持つ夢

凍てつきて乾かぬ足袋のこはせ締め

氣力ふるわせ現場に向ふ

雪みぞれ下着魔羅までぬれそぼち

悴かむ手にて安デズラ受く

足病みて泥足袋のまま医者を訪ふ

患者の視線氣になりつつも

ひもじさの骨身に沁みし日々なれば

飯場のめしも飲み込むごとく

生きたしと思へど難しシャバなれど

心につぶやく“生きぬいてやる”

無題

橘安純

あけましてめでたくはなく路上元旦

初もうで足元の福そつと拾う

ひさしぶり見る顔たくましく元旦炊き出し

あてなく歩いて一日くれて

ゆっくりと腰おろすところなく歩く冬

何もかも重たくなって歩く冬

冬銀河百円玉の重さ知る

冬支度できないまま冬すすんでく

毛布の下でふるえてる

あの人はこの冬を超えるのだろうか

「掲載誌、受取りました。掲載ありがとうございます。発行が長く続きますように、投稿の場がないので、はげみになります。」



陽だまり19

(…お迎えが)

00年8月7日

秋戸 空

1
昼間のほこり

灰色の闇が被かぶさって来て
ヤンカラ仲間は

それも一緒にヤンカラで
飲み下していたように視えた
山谷の新宿の
路上で生きている人々…

……〈世間〉は何と云う

きたならしい連中
私達の街を汚す連中

だから追い出す……と

路上生活者と

共存できないから……と

自分勝手なヤツらだな

〈世間〉のヤツらときたら……

いたる処で……

無色の工場廃液が流れ
有色の工場廃液が流れ

工場廃液は

街を汚して……

そんな時、突然夕暮がやって来た。
身を寄せ合う、仲間、

ここでは、アルコールと煙草
これらに付きまとわれてしまうけど

〈世間〉は「税金も払はないで
飲んだくれている、怠け者」と云う……

反論として、この税金の

税金の優良納税者！

山谷、新宿、釜、笹島、寿

沖繩の、よせ場、八幡の労働下宿
知らぬうちに〈盗られる〉

優良な納税者なのに
彼らをのけ者にしてしまう〈世間〉

路上生活の中で

貧困と病氣と結核は

年中、つきまとって……

……、お迎え、を

待っているような、仲間、たち

また夜がやって来て

夜の水面が浮び上り

ヤンカラ、仲間とはじける夜

……ある、仲間、は云う

「お迎え……早く来て

くれないかな……と

淋しそうに

ほほえんだっけ……

2

人生は前方に

凍て付いた街路があり

この路は

どこまでも延てはいず

行き止まり

だらけの街路だった

いつか自分も……

「お迎え、来るのを

待っているようだった。

……酔いしれて

くつたりと眠りに入る

路上の生活の想いが

何の夢を視る

現実

野たれ死にが……

野宿者の日常の生活は

仕事がないからとアルコールに

溺れるしかない、生きざま、

……次は、お迎え、が

来るしかないのだけれどできるだけ

自分の身を守るしかないから

この、生きざま、を

貫ぬくしかなかった、仲間、たち

公園のはしに

視える仏塔を見て

それにできるだけ背を向けて

反抗するしかない！

それに満足でもするように

彼は、生き貫いて、いた

雨が降って来て……

すると少しでも濡れないように

家の軒下のはじっこに

身を寄るのだった。

あけましておめでとうござります。
皆様も元気で居ますか俺も元気で居ます。
昨年中は色々とお世話に成り本当にあり
がとう御在居ました。今年もがんばって一
日も早く退院するようにがんばる事にして
居ます。俺れ仲間間の事わ一日も忘すれた
事わなる。俺が病院に居るのも仲間そして
リーダ笠井さんたちのおかげです。これか
らよろしくおねがいします。

川柳

東京都明けてもかわらぬ同じ顔
来る年に相もかわらず年お取る
ちよと待て考へなおせ東京都
成人を祝う門出に初の雪
初雪やむすめなかせのうす化粧
枯景ゆえ老いて落行く落景かな
酒断てば想い出話に花が咲く
流されて知らず知らずに年をこす

たたかへばかならず勝つ自信を持って今年もがんば
ります。どうかよろしくおねがいします。

小一

生きる

新城秋男

私自身は、どんな苦勞しても立派に生きて行く事が、どんなに
すばらしい事か初メテ知らせられる思いをさとされました。

たとえ始めの内は不良であつても人にめいわくをかけていても
立派に更生をして生きて行く事がすばらしい事か始めて知り、自
殺したり逃げまわったりする人の気が知れません。特に自殺を考
えたり、した人は、回りの人達の迷惑をも考えみずはずかしい行
為ではないでしょうか僕自身はそう思います。

それは、自分や世間に負けているしうこだと思います。

たとえ宿なしのあるいはダンボールハウスすなわちホームレス
になつても世間の人々に迷惑をかけず必死に生きている姿はどん
な物にも匹敵するのだと思います。

一番大切な事は、この世の中で悪い事にまどわされずにケンカ
やもめ事にまきこまれずに堂々と仕事をし生きて行く事がだいじ
ではないでしょうか。それこそ人間らしい生き方だと思ふ。

2001年1月1日からむこう何年かは知りませんが、私は酒
をやめて男らしく生きて行こうと決意しますが、かたちにまどわ
されず自分本意のままに生きて行きたいと思つております。

のち10年か20年かは苦勞すると思いますが、たとえよこ道によれ
そうになった時は病院での決意をだいじに後50年は生きぬいて行
きたいと思ひ、かたい決意です。

その間に私の人生もかわつて世間の中で生きていると思ひます。
人間らしい生き方を

A A、断酒会の皆さんと

平成13年1月8日

「めぐりあい」

あなたにめぐりあえて

本当によかった

一人でも良い

心からそう言って
くれる人があれば

夢はでっかく

生命の根はふかく

つよく

生きられる

男よ心許したる

一人の友をもて

巨まんのとみを

得たるより

幸せなり

「道」

長い人生はなあー

どんなに さけようとしても…

どうしても通らなければ

ならぬ道といふ、あるだなあー

そんな時はその道を

だまって歩くことだな…

ぐちゃ 弱音をはかないでよ

ただだまって 歩くんだよ

仲間の友よ

ただだまって

涙なんか

見せちゃ

駄目だぜ…

そしてそんな時こそ

なんだよなあ

人間としての

いのちの根が

ふかくなるのわ

仲間よ負けるな

つよく生きろよ…

マッ

入院日記 Yより

路上生活者の皆さん、お元気ですか。

昨年中はいろいろ、お世話になりました。

私も一月十日から皆さんの力をかりて「西八王子病院」に入院生活を送っています。

いわゆる精神病院ですが、今はやりのリゾートタイプの温せん感覚で過ごせる病院で「男、女」の閉鎖病棟といってカギのかかる病棟ですが、開放的な感覚で過ごせる病棟で、安心して生活の出来る所です。

私も、早く病気が良くなったら退院して又連絡会の仲間と一緒にバトロールにまわり一人でも多くの仲間とまわりたいと思っています。

皆さんも一人で考えていないで連絡会の人達に相談して、早くかいけつしたらいいと思います。

私も二月中には退院出来そうですが、出たら病院の近くに援護寮に入る予定です。社会復帰に向ってのための寮です。これからは長くつきあって行きましょう。

無題 Kより

2001年 おめでとう。ございます。

年明からかなしいニュースがありました。世田谷でわ一家ごろし早くはんにんがつかまるように、仙台では筋弛かん剤混入事件。がいこくでは地震、となりの中国でわ敵しい寒波によるひがいが深刻化しており、日本れつとうでわ、沖なわをのぞく北から南まで雪がふっています。また伊豆はんとうのこうずにいじまで地震がありました。

白銀の夢

君の涙が雪に変わる…。

凍えた街の中で、一人白い息をはきながら、君は途方もない、さびしきで歩き続ける。

僕はギターのない部屋で君の帰りを待っている、たださびしいのじゃなくて、僕はギターを弾いている、用もないのに君は街へ出て行った。ただ雪が見たいと…かなえられそうもない夢をかかえながら…

ただこのままでいいとは思わない、少し何かが違っただけ、君はその事で責めたてた事があるが、それは君のさびしさだろう…

君はまどを身ながら「今日雪が降るといいね」と「私の涙が雪に変わるから…。」

街に雪が降ると何かわるの？

「あなたにはわからない…」と君が言うと…僕は君をだきしめた…僕の夢、君の夢、僕のア、君のア、空の雪、街の風景、それは白銀の夢…君は雪の降る所で育った。だから「私の涙が雪に変わる…」と…

北の街では雪で動けなくなるようになって…でもそれは街の風景がもたらしたのかも「関係ないよ…」と君は言う…ギターを弾きながら君の帰りを待つ…別にけんかしたわけじゃあない…君は雪の降る所で育った、だからさびしさをいやすために街へ出た…街の風景みたいに心が寒くならないように、心が冷たくならないように…僕がだきしめてやるよ…そして強くなる…君の涙が雪に変わる…僕の夢、君の夢、僕のア、君のア、空の雪、街の風景それは白銀の夢…。



明日

泣くのはよそう、明日は来るから、そして愛なんてないって言わないで、どこかで君を見ているからどこかできつと……君はとも寒がりな泣き虫な女の子さ、雪の降る街……一人で街の街灯を見ている、でも……その街灯を見て……そんな君でも僕に勇気をくれた、一人じゃないさ……どこかで君を見ている、今、会えないとしても僕がいるから安心して、とても弱い僕だった、君の笑顔が僕の気持ちをあたためてくれた、いつしか君はよく泣く様になった、メッセージのない留守電、あて名のない手紙、とてもさびしくなるよ……でも僕は君を責めはしない、泣くのはよそう明日が来るからそして愛なんてないって言わないで、どこかで君を見ているからどこかできつと……

くもり空もいつしか陽がさすだろう、その陽を見て……一人じゃあない一人じゃ……

今、君に会えないとしても、心がどこかでつながっている……まるでテレビパシーを送るかの様に……さびしいのは君だけじゃあない、人はどこかでさびしさをかかえている……笑顔を見せて……その笑顔から何かが始まるさ、そして色々な物を背おつても、しばらくつづける事とは違うのさ、見て……空を見れば自由を感じるだろう、人はさびしさを背おうたために生きてきたわけじゃあない、何かを探しに生きてきた、僕は君が夢なんだいつしか二人で育み、愛を育てるんだ、泣くのはよそう明日はくるから、そして愛なんてないって言わないで、どこかで君を見ているから……どこかで……きつと。



21世紀も 路上支援は新宿連絡会

路上のなんでも屋は、やり直しの
出来る社会をめざし、今年も
破天荒に進みます。

東京の路上支援運動を知るなら、
新宿連絡会NEWSを読もう！
VOL.21号 (越冬特集号)
好評発売中！
B5版18P 定価100円お求めは
手紙、FAX、メールにて。

新宿連絡会

111-0021東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会内
☎03-3876-7073/090-3818-3450 FAX03-3876-7073
<http://www.jca.apc.org/nojukusha/shinjuku>
E-mail inaba@jca.apc.org

<カンパ金送り先>

郵便振替口座：00170-1-723682「新宿連絡会」

*カンパ物資は土日指定でお送り下さい。

太陽の宮殿

鈴木克彦 作

その四 エアの窓から

(太陽の宮殿の粗筋一七十年安保で挫折した青年Xは、空しい気持で水商売の世界に迷い込み、イデオロギーや親念世界から免がれて、毎日楽しく遊び暮す。そんな生活の中でヤクザの親分と知り合いになる。急いXは男っぽい右翼思想に傾いてゆく。そんなXを親分はアメとムチで鍛え、語学、行動力のあるXを、インド・ネパール地方をバックカー姿で歩かせ、下々の人から魔華情報やら華のサンフルを持つてくるよううまく仕向ける。

ところがXは、インドに入国して有金を盗まれ、帰るに帰れなくなって、当時日本で珍しかった、インド・カシミールの毛布のコートを日本に送り、友に売ってもらい、その金で親分との約束を果たそうとする。そんな生活の中に、インド周辺を旅する様々な人と会い、彼らと共に会話し旅することによって、華その他の事情、現情を知り、また自分のヤバイ今の立場を見い出して脅え、それによって親分、組の精神的圧力に耐え兼ね、マリワナ、ハッシッシを愛用するようになる。が恐怖は減らず逆に喘息を起し、体力も神経も衰弱し、妄想に脅え、鬱状態になってゆく。

ある夕暮れのもの憂い気持の中に、郊外を歩いて急流の小川に出、憂鬱な思いのままに足をすべらせて頭と体を打ちつけ、まる二日気を失なってしまう。その間にも自意識は静かに働いて、あたかも離魂状態の如く、小川から大河へと身が流れて、次には空を飛び、海浜から海上を飛行し、小島の波打際に落下する。そこは太陽の宮殿への白い石段があり、見上げると石段には、目を射るほどにきらめく神の素足が見えた―実は素足はXを救ってくれた、若い日本の僧のものであった。

Xは若い僧にしはらく看護を受けるうち、恐れ苦しみから免がれて、人としての価値、生き方を知り、この地でやってみようと思う。そのためには日本に帰り両親や友達に別れの挨拶をし、借金を返してこようと考える。

インドのバトナから雨期の始った緑のビハール平原上空を飛ぶXは、かつての魂の飛行と同じ自分を思い、眼下の大自然が奏でる交響楽を感じ、感極まって叫ぶ。親分暴力は止めてくれ。我欲のために魔華売買は止める。人を利用し食い物にするな―人として生まれたからには大きな使命、目的がある。それは人の為に尽くすこと、世界平和のために働くことだ。自分は小さな我より脱し、大我に生きる―やがて機はベンガルの鬱蒼としたジャングルの中に蛇行するガンジスの大湿原をぬけ、ベンガル湾海上へ―)

むかしむかし、人の子供を攫って食べる美しい羅刹女キシモは、お釈迦様に、自分の子供を隠されてから、人の子供をとって食べることは、どんなにその子の母を悲しませることか、我が子とはどんなに可愛いものかを知って、仏に帰依し、子供を慈しみ守る、優しい神になったということです。

ハンドクは兄と共に、路上に産み捨てられた非人の子供。愚かで、お経の文句を覚えるどころか、自分の名前すら書けません。兄に、「お前のようなバカが教団にいたのでは、みんなの迷惑になるから出て行け」と言われ、いつまでもお釈迦様のお側にいたいのに、王舎城の門の前で泣いていました―夜も更けた頃、そ

んなハンドクの前にお釈迦様が現われて、白い布を渡し黙って去りました。ハンドクはその布で、埃やごみを取ることは、悪い心をなくすことだと考えて、一所懸命みんなの履物をみがく修行をし、後には優れた仏弟子となりました。

霊鷲山の頂には、今もお釈迦様とお弟子達がおられて、心の清い人の目には、その中にハンドクの姿も見えるということです。

今はむかし。ブタガヤにお釈迦様一行が現われになると聞いた、貧しくその身をひきぐ少女は、やっとためたお金で小さな灯籠を買って、多くの人の灯籠の中に飾り加えました。少女は来世の幸を祈って手を合わせ、いずこかへと去って行きました。

夜になってお釈迦様達がこられた時、にわかに変風が吹いて、灯籠の火はみんな消えてしまいました。けれども、少女の灯籠だけは火が消えず、お釈迦様達の通る道を、明るく大きく照らしました。

今も残る灯籠のお祭りは、それから始まったということです。

悪人に騙され、唆されたアングリマーラは、お釈迦様と信者達を憎み、ひとりひとりを殺して、その者の小指を切り取って、首飾りを作れば教団を呪い潰すことができると信じたのでした。それが満願の千人目、暗がりを歩いている信者を殺そうとした時、突然、お釈迦様に、それはお前の母親だぞ！と叫ばれ、愕然と膝を落

し、激しく泣きました。

多くの人々に花で飾られ、多くの男女に祈られ親われて、多くの子供の心の中に生きている私は、永に幸いなるかな。

グリーン、グォーンと鳴る飛行機のエンジンの下に広がるビハールの大地は今、緑に包まれている。そこには千古変らぬ悠久の歴史と人々の生活がある。岩山に羊を追う髪ボーボーの半裸の少女。乾いた牛のフンを燃やしてチャパティ(薄いパン)を焼き、サブジ(野菜煮)を作るヨレヨレのサリーを纏った母親。乳のみ児。乞食

は寺院の石段の入口に群がり、色とりどりのサリーを纏った娘達はしなやかに歩み、白いこぶ牛に、山のようにワラを積んだ車を引かせるフンドシ姿の農夫。ジキジキハウス(淫売窟)の女達は鉄格子の中から腕を伸ばし、道行く男を、パン(噛みタバコのような嗜好品)を噛んだ真っ赤な口で呼び込み、時々べっと赤い唾み汁を吐く。ゴミだらけのカオスの街で朗々とコーランを唱う回教徒。雑多と喧噪の中に力車は走り、

バスは行き、物売り物乞いは行き交い、犬やカラス、牛までがうろつく。そんな所にある祠や堂に、女神は妖しいほど凄惨な血をしたたらせながら永遠の眠差して人々を見ている。子供は神話の猿神に供物を捧げる。駆け狂う歴史、雄叫びを上げて戦う神々、くるめく太陽の下に、時間も空間も忘れ果て、神話と貧困、差別に酔

い痴れるインド、人はけたたましくかつ親切で、頑で、悪賢く、運命に身をゆだねつつ、古来変らぬ習慣の中に生きる。それらを包み込み、大河は洶々として永遠に流れてゆく。

ビハールの大地からボクは聴いた。一斉に響いてくる大地の歌。地に働く人々の歌声。男声、女声の歌。子供達の母の歌声。ヒマラヤの歌、ガンジスの歌は大自然の交響楽となって大きく気高く鳴り響いてくる。ヒンズーの歌。神々の歌。喜びの歌。労働と汗と涙の収穫の歌。神へのささげ物。それはボクの心を熱くし、祈りの力、アジアの力、人のために働こうとする力と勇気を与えてくれるようだ。

自分は今まで何をしていたんだ。己の欲望と快樂のためだけに生きていたのではなかったか。そんな生き方は、暴力団に生き血をすわれる人、インドの最下層に生きる人々や、戦争で手足が不自由になったり、身なし児になった子供達、世界中の食えない、虐げられた人達に申し訳ないのではないか。

人として生まれたからには、大きな使命、目的がある。それは！

親分止めてくれ！人を殴り、蹴飛ばすのは。己の怒りと憎しみだけのために人をいじめるのは。男を女を利用し食い物にし、踏み台にしてまで肥え太るのは。人の人権や生活、未来まで潰してしまうような生き方は。

―寒いネパールの夜明けのバス停。国境近くの広場。乞食の少年達が、貧しい寝具を肩にかけ、震えながら建物の壁にもたれて、もらった煎餅を嚙っているではないか。

女神。あるいは観音は、そんな子に優しくことばをかけている。それは無き母の語らい―人を恨んだり、仕返しをしてはいけませんよ。決して世に見離され、孤立しているのではありません。耐えなさい。必ず幸はくるのです。手も心もきれいに洗い、働きましょう。何か良いことをしましょう。

―おお！ボクの手は汚れているのだ。いつの間にか―ブツは焼き捨てたが、この手で一度は掴み、税関の目を逃れて運び出そうとしたのだ。

ホテル（一泊二百円ほど）のカンジャ（少年）は、山の部落の子。親に、お前は六つにもなったんだから家を出て、ひとりで食っていけ、家には小さな子が多いんだからと言われ、三つも山を越し、道々親切な人から食べ物をもらって七日も歩いてカトマンズ―にきたという。町に入っても、小供乞食の仲間に入るしか生きる道はない。そんなカンジャはホテルのマナージャーに拾われ、三食付き無給で雇われた。だが誰の後楯もない正直者のカンジャは、やがて盗みの罪をなすりつけられ追い出された―どんなに傷ついたことだろう。かつては部屋代を踏み倒して逃げたヒッピーを追いかけて掴まえて手柄を立てたのに―宿の親戚の子がきてお払い箱にな

ったのだが、本当の理由は部落の違うカンジャ同志の差別のし合いが原因らしい―その後、バス停で、バスの屋根の荷台から荷の上げ下ろしの仕事をしていたが、小さな体では無理だったのだろう。いなくなった。

親分止めてくれ！己の一時的激情で、誤解で、我を通すだけのために、前後の見境もなく人を怒鳴り、脅えさせるのは。口のきき方だの、義理だの、人の上下を言たって、分かん人には仕方がないし、一般的なことじゃない。どうだっていいことだ。長いこと仕え、貢いだ者、信頼していた者まで、一瞬にして断ち切るのは。人を許せ。人を差別するのは止めてくれ。少しぐらいケンカが強い、度胸がある。金がある。リーダー格であるぐらいで、尊大ぶるべきではない。

おお、食っているではないか。我々の食い残しを。小さな子が、たったひとり、寒空の中にボロを着て―目にヤニをため、ガサガサの足は、皮膚が破れ、血がにじんでいる。それでも精一杯生きているではないか。

見栄を張るのもいい加減にしてくれ。東大生だとは言いがた、英語も話せず、ロクに漢字も書けず、歴史も文化も知らず、高級服で一流のレストランで食い、一流のホテルのスイートルームで寝、ファーストクラスのエアに乗り、ボルシェやロールス・ルイスの車も十台も持ち、

高級ヨットを二隻、五階建てのビルに住み、メルクリンの模型電車で遊び、スカイダイビングにスキューバダイビング、レーサーで、デザイナーで写真家でビジネスマンで、プレイボーイで、ヴァージンキラーで、そんなもの、何ひとつ興味もなくうらやましくもない。自己顕示だけの男など尊敬にも驚嘆にも当らない。人生に意味が感じられなかったボクの一時期、親分の持つ、CIA職員のような能力に憧れただけだ。空手二段、剣道二段、怒ると全身が炎に包まれた不動明王の如き姿には、怖れ戦き、震えて体も動かない。それは確かだ。だからといって、滅私奉公も絶対服従もしたくはないし、命を抛げ出せるお人でもない。まして魔薬を運ぶなんて絶対お断りだ。鉄砲弾、これもノー。

見よ親分。ガンジス河の河口。今雨期で、雲の切れ目から、幾十にも幾百にも分かれた大河の支流が、蛇のように三角洲をのたうち回り、ジャングルの木々の緑はモリモリと、爆弾が無数に破裂しているかのうちに、一斉に生の喜びに萌え狂っている。そこには中世代から生き残った大蛇や巨大な蛙、蛙もいることだろう―やがて機はベンガル湾海上へぬけるのだ。

（完）

（太陽の宮殿は四部作の長いものですが、その中からひとつずつ取り出し、四つ目の今回で終了です。物語はフィクションで、登場人物は事実、実物ではありません）

(一)
別れが辛いと、こがれて泣いた、
愛しいあの娘の、形見のこけし、
あの娘は病気で、死んだけど、
こけしの胸に、生きている、
ネンコロ口、ネンコロ口、
あの娘が唄った、子守唄、
風吹く夜は、唄うのさ。

童謡、
ねんねんころりよ、おころりよ、
坊やのお守りは、何処へ行った、
あの山越えて、里へ行った、
里の土産に、何貰った、
でんでん太鼓に、笙の笛、
鳴るか鳴らぬか、吹いてやろ、
坊やの良い子だ、ねんねしな、
ねんねんころりよ、おころりよ。

こがらし
風の
子守唄

(二)
俺等が東京へ、旅立つ夜は、
涙で濡れてた、あの娘のこけし、
あの娘は帰って、来ないから、
こけしは独り、待ち詫びる、
ネンコロ口、ネンコロ口、
今夜は凍れて、冷たかろ、
あの娘も独りじや、さみしかろう。

(三)
形見のこけしは、湯の町こけし、
あの娘に良く似た、可愛いこけし、
二度とは逢えない、悲しさを、
こけしに語る、子守唄、
ネンコロ口、ネンコロ口、
あの娘が唄った、子守唄、
風吹く夜は、唄うのさ。

弓削鴻介

詩集 「エロヌの廃園」 より 望月大成

五、死体焼却人

おれはお前を殺したい

お前の妻 幼い子供まで 道づれにして殺して
やりたい

おれは願っている こゝにある死体

泥まみれのシーツにくるまり

素っ裸にひんむかれ

こま切れになった 悪臭鼻をつく腐肉

これがお前たち親子の 浅ましい死屍であるこ
とを

おれは心から願ったものだ

凡夫どもは 叫んでいる

教祖を守るため お前の口を塞ぎ

極悪の血をたぎらせ 幼児まで絞め殺したとな

血も涙もない狂信者 サディスト

何とでもわめくがよい

ほざきたけばほざけ 叫びたけば叫べ

凡夫がどう騒ごうと シヴァ大神に捧げた崇高
な誓い

正義の信念はゆるぎはしない

ほつペタに蠅が止った感触でしかない
お前はおれを恨んでいる

憎んでいる なぶり殺してやりたいと思ってい
る

地獄の業火にたゝき込まれ

身をずたゝに 焼き尽くされ、ばよい

そう願っている

おれには ちゃんと分るのだ

今でこそ言う おれはお前を救った

お前は許されざる悪業を積み

妻子もろとも 地獄へ落ちる身だったのだ

若い女房 幼い子供を見た時

おれは神の啓示を見た

お前たちを救わねばならぬ そう信じた

灼熱の地獄へ落ちて行くお前を 見るに忍びな
かったのだ

せめて妻と子供は 救ってやらねばならぬ

そう思った時 おれは決断した

お前たちを焼くーカルマを洗い落す

お前たち一家を焼けば お前の積んだ悪業の力

ルマは消え

すべてこのおれが引受けることになる

それでもよいと思った

お前たちはおれのおかげで 来世は人間界

それに引替え このおれは

お前の積んだ 背負い切れぬカルマの海に溺れ

来世は 動物 餓鬼 地獄ー

分るか おれはお前の救済者なのだ

偉大なる我等が聖者 グルの救済事業を助けるた
め

この世に生まれてきた 弟子

せめて地獄に落ちなければ それでよい

おれは満足だった

おれは実行した お前たちを焼いた

後始末を託された時も 何のちゅうちよもなかつ
た

薄暗いコンテナの一角

おれは見た 横たわる二つの母子の骸

スモール電球の 仄かな灯りの下に墨を塗りたく
ったような

どす黒い死斑に包まれた肉塊

鋸を使い おれは次々とバラした

頭 手足 胴体ーと殺場の牛を解体するように

内臓を抜きとり 膾分けして

バラゝになった こぶし大の腐肉の塊を

電子レンジに投げ込むのだ

高圧電流の下で 青いプラズマの灯

灼熱に収縮した頭骨は 握りこぶしの肉塊
肉片は赤黒い炎をあげ グロテスクな黒塊と化
してゆく

この世の未練も 怨念も

一切がウラズマの光に消えてゆく

これは地獄だ 怖るべき現世の灼熱地獄なのだ
これでいいのだ これは救済なのだ

お前の悪業のカルマは

この世の穢れ切った 仮の場の肉体とともに

ブラズマとなって消滅する

これは崇高なるシヴァ大神 グルの御意志であ

り

仏陀の慈悲の御心なのだ

お前は死んで幸せだった

聖者を誹謗し 真理に背を向け 悪魔の手に売

り渡し

地獄のカルマに どっぷりと浸ったお前

そのお前が 神の業罰を受けず

現世の地獄を見ずに

来世は人間 いや それ以上のステージ

宝くじで巨万の富を手にした にわか長者のお

前は

一切のカルマから解き放たれ 自由なる身

お前たちが自由でいられるのは

おれが救済者だからだ

カルマという名の 重い負債を背負って生きる

受難のおれ お前は幸せ

神はお前に 機会を与えたのだ

お前は有能な弁護士 地獄か 天界か

来々世は来世のお前 それにすべてがかかっ

ている

己の所業を顧みず 悪業を重ね続けるなら

その時こそ お前は地獄

六万カルバの 灼熱と極寒の地獄が

お前を待っているのだ

死体を焼いた後 おれは不満を隠さなかった

おれは見せつけてやりたかった

たとえ 幾ばくの苦難を背負うことになって

も

教団にも 力ある一匹狼

刃にかけても 神の意志を実行する狼

テロリストがいることを

力こそが唯一の おれの存在証明

グルへの絶対的な帰依 利心なき奉仕の精神

は

時には力をも必要とするのだ

おれはそれを実証した

おえは国松を討ち 懲罰の深手を負わせた

今宵 酒場の片隅で こっそり親しむビールの

祝盃

一ぱいの悪魔の美酒―禁断のこの味

これでいいんだ これ

犯すべからざる 戒 掟の重荷も

グルを守り 一人の衆生を救済した事業の前

には

さ、やかな掟破りに過ぎぬ
おれは勝った！ 遂に勝ったのだ！

旧題「弁護士一家殺し」
1996・8・27 改題・改作 山谷にて

七、結婚詐欺師

―創価学会員の長男の告白から

父サン！ 母サン 騙シタロ？

チャント知ッテルヨ

オレナ ソノ氣ンナリヤ 父サンブツ潰スノ

本當ニワケナインダカラナ

父サンノ本家がキ印デ

父サンガ若イ時 キ印ダッタコト

小金井ノ人タチガ 日蓮宗ノ恐ロシイ邪教ノ手

元デ

結婚詐欺デ マトモナ人タブラカシ

一族ニ引キズリ込ム

手口ハミンナ チャント知ッテンダ

オレニハネ 本當ノコト話シテクレリイ、人ガ

イッパイツイテルンダカラ

母サンハ 本當 可哀ソウヨナ

邪教日蓮宗ガ仕組ンダ 詐欺ニ操ラレタンダ

姉チャン産ンデ 次ニオレガ産レテ

婆チャン ノコ、ヤッテキテ

言ツタコトガフルツテル

望月ト内山ガ 仲ヨクスルタメニ

今ノ内ニ真実ヲ打明ケル 父チャンハドキチガイダツタ

ヨク言ツタモンダヨナ

ベテン師一家ノオ頭ダケノコトハアル

既成事実ヲ作ツテオイテ 身動キ取レナクシテ

後デ善意ヅラシテ押シツケ

ミンナ聞イタゼ

邪教日蓮宗ノ 結婚詐欺師ノ手口ヲナ

可哀ソウナ 母サン

父サント結婚スルコトガナケレバ

人生モット幸セ モットイ、人ニ巡リ合エテヨ

幸セノ人生送ツテタ

オレダツテ トンダトバツチリヨ

オレノコノ病氣ダツテ

ミンナ日蓮宗ガ持チコンダ業病ナンド

今頃ハイ、親父持ツテ モットマトモノ人生イ

キテイタ

父サンが憎イ 日蓮宗モ憎イ

人ヲコンナ不幸ニスル ホント悪イ宗教

小金井ノ人タチハ悪魔ダ

オレタチ 散々不幸ナ目ニ遭ワセテオイテ

ノウ、ト暮シテヤガル

父サン 言ツトケド

戸棚ノ奥ノ才仏壇 近ヅイチャダメダヨ

オレ分ルンダ ソノワケ

アソコハ 父サンノ行クトコジヤナイ

母サンノ大事ナオ部屋 邪教ハ近ズイチャイ

ケナイヨ

オレタチ一家ヲ守ツテクレル

大切ナ御本尊ノ場所

母サンヲ助ケトクレル 一家ノ守リ神

父サンハ見チャイケナイシ 知ツテモイケナ

インダ

タマ働イテ お金持ツテキテクレリヤ

ソレダケガ父サンノ仕事

ダツテ 父サンガイナクナツチャタラ

オ家のローン 払エネーモンナ

デモ イ、ンダヨ 父チャン

イヤナラ出テツテヨ

オレニハネ 池田先生トイウ偉イ人ガイル

池田先生ヲオ父サント思エツテ

アル人ガ教エテクレタ

オレダツテソウ思ウ 父サンイナクタツテ

母サンニハ味方ガイッバイイル

オ友ダチガ暮シニ困ライヨウ 助ケテモク

レル

コワイコト 何モナイ

ソレヨカ 父サン オレタチカラヨ

離レラレルカイ? デキルモンナラヤツテミ

タラドウ?

キ印デ使イモノニナラナイ

ソナ父サン 行クトコアンノカイ?

アバヨ 父サン

邪教ノ手先デ 結婚詐欺師ノ父サンヨ

人ヲ騙スノハヨシナ

必ズ仏罰ガ当ルヨ バチ当リ

小金井ノ家ダツテ ソノ内一家離散ノ運命ダ

ツテ

必ズ大バチが当ルンダ

父サンダツテ 同ジ穴ノムジナ 学会の人言

ツテタ

オレノコト グジマ文句アンナラ

オレダツテ覚悟 ソン時ハ

父サンノ正体 ミンナニバラシテヤッカラナ

チャント 覚エトキナ

1996・9・12 山谷にて

十六、朝日新聞を潰そう

―陸上自衛隊市ヶ谷駐とん地 予備自衛

官召集訓練 連隊長訓話

こ、だけの話ですよ 本当に

朝日は悪い新聞です 共産主義のアカ

ソ連の手先になって 我が国を共産主義の侵

略のため

ソ連の前線基地 それが朝日の正体です

私、確認を取っております

編集局は秘密警察の 日本人職員
偏向記事をふりまいて 日本人を洗脳するため
のです

天皇制を打倒し ソ連の治下に収めるのが
恐るべき究極の野望なんです

それが彼等の目標です

いつか 日本は共産主義の奴隷になり下がり
日本列島はその植民地になります

憂うべきは 朝日の野望

その旗振りの下に

マスコミは民衆洗脳の道具となつて

間接侵略の嵐は 既に我が国土を犯しています

すべて 朝日の悪だくみです

朝日は今や 日本のマスコミを牛耳り

その牙を露にしています

予備役の皆さん 国を守ることは

武器を取って戦う それだけではありません

敵は既に 我が本土日本に

上陸しているのです

朝日は売国奴の手に 完全に掌握されています

この憂うべき事態 どうします? 手をこまねい

て眺める?

そんなことでは 国は守れません

皆さんは誇りある自衛官 そして社会人でありま

す

皆さんの負う役割は 愛国者として

実に重大であります

五日間の軍事教練が 召集の目的ではありません
ん

社会人としての自覚 任務

これこそが 皆さんの重大任務なのです

民衆としっかり手を組み

偏向マスコミから 民衆と国土を守ること

それこそ 榮譽ある自衛官の

尊い任務であります

朝日はいつか 懲罰を受けるでしょう

その正体を見破られ 正義の鉄槌がふり降ろさ

れます

社屋と社旗は 銃弾に見舞われます

民衆の怒りのつぶてが

雨あられとなつて 降り注ぎます

民衆を愚弄し 侮った報いは必ず受けるのです

誰も朝日新聞を読まなくなります

地上から朝日の名が抹殺される日 必ずやって

きます

売国奴の多くは 続々母国に帰ります

その時まで じっと我慢の子です

日本人は血を好みません

去る者は追わず 黙って見送ってやります

ソ連 中共 北朝鮮――

それぞれ雇い主のところへ帰って行けばいいの
です

皆さん

その晩には一堂に合して

平和で豊かな国 日本

神国日本の安全を祝って 祝盃を挙げましょう

世界の大国 日本の繁栄を願いつ、
再会を約しましょう

1995・8・3 改作 上九村にて

編集部より

望月さんより今回はこの三作品が送ら
れて来ました。それに添えられた手紙で
は個人名など伏字にする事の可否は編集
部に任せると記されてあります。

望月作品はかなりぎりぎりの瀬戸際の
所で勝負している作品であり、評価は
様々あると考えます。が、三つの作品全
体を通して考えると彼のきつい表現の真
意が読み取れます。その真意こそが重要
であり、その真意を読み取るためにも、
個々の名称や個々の表現はこの作品にな
くてはならない構成部分であると編集部
としては考え、今回伏字などの編集をせ
ず生のまま掲載することにしました。

平成12年12月20日、水曜日、いつものように立川にしき町グループミーティング場であるカトリック立川教会に着いたのは、18時10分だった。すでに仲間が二人いて、「今晩はコウさん、会場チェアマンが来てなくて中に入れないんですよ。」と言ってきた。念入りに時計を見たが、18時10分だ。「こんなことないよなあ。交通事故故にでも?」「風邪でもひいたのかなあ。」等と返答している間にも次々と仲間が集まってきて、「あれ、まだ聞いてないの。」「しきさん来ないの。」「聞くまで車の中で待ってたら。」「昔とったきねづかで、針金一本で開けなよ。」「誰れもいなければ、十八番を使うんだけど。」等々、馬鹿な事を言っていると、教会の人が来て、「今、開けてあげるから、ちょっと待って。」と言って、18時30分開場になった。

メンバーは私一人なので、うろ覚えの場所から、AAプレートとかコーヒール等を会場に運んでなんとか準備をしていた。私はこの11月22日にメンバーになったばかりのホヤホヤなのだ。ほどなくグループチェアマンが来て、「ご苦労さん、しきさんまだなの、一人で大変だったねえ。」と言って、私と病院が同じだった女性と一緒に準備を手伝ってくれた。あとはお湯が沸くのを待つばかりとなって、厨房の中でぼんやり立っていたら、グループチ



ェアマンが、「コウ、今日からロダンでいこう。ロダンはたしかいはいはずだ。うん、それがいいよ。」と言った。「ロダン」だと言われても、冗談だろうとは思っていなかった。

やがて、19時になってミーティングが始まった。今日一日、飲まないでこの会場に帰ることが出来た感謝の黙想から始まって、序文。第三章を前述の女性が朗読した。そして、グループチェアマンである司会者が、「では、12のステップをロダン：お願いします。」と言った。いつもは名指しす

ることなく進行するはずなのに。私は、一瞬、「ウン」と思い、「あれえ」と考え、とまどったが、すぐに、「はい。アルコール依存症のロダンです。」と言って、「AAの12のステップ。1、私たちはアルコールに対し無力であり、思い通りに生きていけなくなっていたことを認めた。2、自分を超えた大きな力が、私たちを健康な心に戻してくれると信じるようになった。3、私たちの意志と生き方を、自分なりに理解した神の配慮にゆだねる決心をした。4、恐れずに、徹底して、自分自身の棚卸しを行ない、それを表に作った。5、神に対し、自分に対し、そしてもう一人の人に対して、自分の過ちの本質をありのままに認めた。6、こうした性格上の欠点全部を、神に取り除いてもらう準備がすべて整った。7、私たちの短所を取り除いて下さい」と、謙虚に神に求めた。8、私たちが傷つけたすべての人の表を作り、その人たちが全員に進んで埋め合わせをしようとする気持になった。9、その人たちがほかの人を傷つけない限り、機会あるたびに、その人たちに直接埋め合わせをした。10、自分自身の棚卸しを続け、間違ったときは直ちにそれを認めた。11、祈りと黙想を通して、自分なりに理解した神との意識的な触れ合いを深め、神の意志を知ることと、それを実践する力だけを求めた。12、これらのステップを経た結果、私たちは霊的に目覚め、このメッセージをアルコールホリックに伝え、そして私たちのすべてのことにこの原理を実行しようと努力した。ありがとうございました。」と朗読した。そして、私は、「ウン、今からロダンなのだ。私の事を考え、想ってくれる仲間が出来たのだ。コウという人があまりにもたくさんいることから、皆

んなが何かいい名前はないかと考えたし
て、たぶん、おそれおおい妄想かも知れ
ないが、そこに居合わせた仲間が私を、
ロダンの『考える人』をイメージしてく
れたのだ。」と思って、なぜだかわからな
い安堵感が充ち溢れたのだった。

この話に後日談が出てくるのは当然で
ある。他の会場へ行くたびに約8ヶ月近
くも「私の名前、コウ」を使っていたわ
けだから、急に私が、「ロダン」を名乗る
と、「何だ、コウ、どうしたの」「心境の
変化か」「何があったの、コウさん」「ロ
ダンなんて十年早いよ」「失恋でしょう」
等々、言われることは目に見える。そん
な妄想が次々と想い浮んできた。

翌日は、ホームグループと同時進行の
型で通わせていただいているミーティン
グ場だった。ミーティングが始って、私
の発言する番がきた。「アルコール依存症
のコウこと、ロダンです。」と言った。こ
れも妄想かも知れないが、会場にいた20
名程の仲間の視線が一斉に私に集中した。
たまたまかけるようにして言った。「ロダン
という名前は昨日から使い始めました。
実は○△□の×。こういうことなのです。
まもなく、グループをにしき町にして1
ヶ月になるのですが、ようやくAAの仲
間になれた、と、思うことが出来ました。

こんなロダンをよろしく願います。」
と言った。

20時30分にミーティングが終って、帰ろ
うとしていたら、病院に入院中、メッセー
ジによく来ていた仲間が、「コウさん。い
や、ロダン、オレ『考える人』持っている
記念に差し上げよう。」と言ってくれた。
帰り道、ルバン三世の主題歌、「ルバン
♪パン♪」のふしで「ロダン♪ロダン♪」
とやってみた。何とも感じがいい。「ロダ
ン♪ロダン♪」…皆んなも言ってみて。

平成12年12月24日記

20世紀が終り、21世紀になった。

1月1日、10時30分から夕食まで施設の
カリキュラムがなくフリーだった。13時
30分から原宿ノリオビル3階でAAミーテ
ィングがあるので明治神宮へ初詣に行く
ことにした。明治神宮で、遠々と人並みが
続くなかで、「よし!!お酒を飲まないお正
月を迎えることができた。記念すべき21世
紀をお酒のない人生にしよう。」と心に誓
った。13時20分、ミーティング場に着いた。
お酒を飲んでない顔があった。お酒を飲ん
でいない声で、「おめでとうございます。
本年もよろしく願います。」の声が行
き交った。その中に、『考える人』を差し
上げよう」と言ってくれた仲間がいた。

「ロダン、この5日に神宮前に来てほしい。『考える人』
を持って来るから。」と言われた。まさか、本当だと思
っていないかったのに、ロダンの『考える人』が手に入
りそうだ。

当日がきた。会場を見つけるのに少し手間だったが、
18時40分に会場に着いた。

入口の右側に机があって、コーヒー等が置いてあつ
た。しかし、瞬間、私の目に飛び込んだのはロダンの
『考える人』だった。凛々と、さんざんと黒びかりして、
かなり広いミーティング場を一人占めしていた。仲
間とロダンの『考える人』がある限り、「お酒よさらば。
さらば、さらば。」

平成13年1月5日記

*コウ・ロダン・アノニマスネーム。AAの12の伝統と
いうのがあって、その
11、私たちの広報活動は、宣伝よりもひきつける魅力に
基づくものであり、活字、電波、映像の分野では、私
たちはつねに個人名を伏せる必要がある。
12、無名であることは、私たちの伝統全体の霊的な基礎
である。それは各個人よりも原理を優先すべきことを、
つねに私たちに思い起こさせるものである。





Orange Acrobet

創造のシマンタス

輝きは星・星・星

大気は流れて

苗々にとも似る

風見心地とめ

夏より

最も  そい

したること

愛と理

小谷の人の心に

愛は、あるのたううか

愛がある人間というの

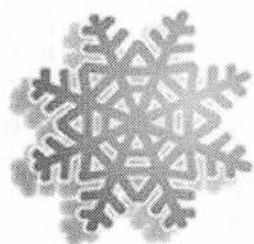
な、どういふうに表われ

るのか、人の理を

どういふうに現われる

のたううか？

09年
12.18



山谷の地下室

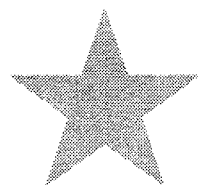
山谷に暖かい所がある
 俺ね、地獄に来たのか
 天国に来たのか、今だにわか
 いないのである。俺は俺自身
 自分なんか何をやっているのか
 わかっている時がある。

60年 1426

我が<国>の旗
 <死>の丸…の旗
 明治維新以来の
 歴史を司とった旗
 血見ゲ代の旗
 オリンピックでも
 掲揚される
 <国歌>なり

山谷を訪れる一詩人より
 00.9.12

私の宝
 宝物を探して全国
 かしどこにもなかった。
 どこにあるのだろうか。
 考え方 若し時の日々
 '01年 17 神は愛を
 うるさいノヤカましい
 6/13 (9)



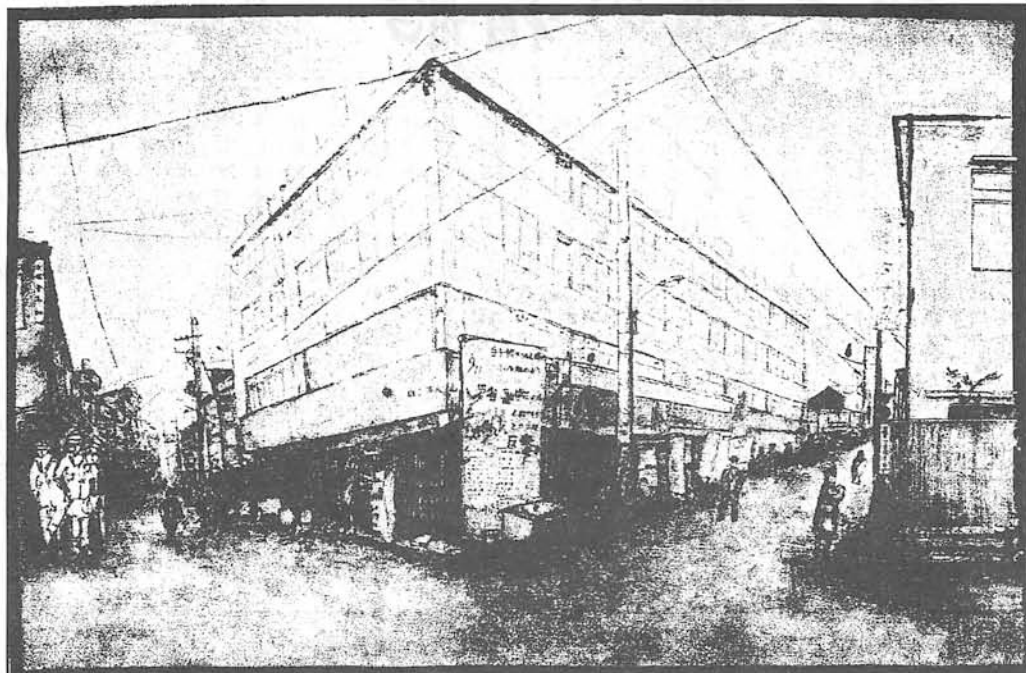
雨が降っている
 新今日の太陽が
 降っている！
 生き生きとしている
 白雲、人々、キヤベツ
 魚と、お米、の中に
 たんぽう
 雑炊を作る

大声で言葉が
 行きかたていて
 おまにあられる
 「生きる」とは
 こういうことなのだ
 〈世間〉を良く知る！
 この世を〈世間〉で
 実践したら
 〈世間〉が生きと代わ！
 'A. 1029

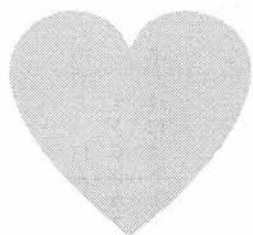
山谷寄せ場

寄せ場に集まる人々、は
 一般の人々においていける
 技術的に、精神的にも
 つまり、おちこぼれた人々の集まり
 である、今日も暮していける
 食べていける、社会でも
 最下の人々である、その中から
 一人でも、最高の人が生まれる
 ことを、信じて寄せ場に暮して
 いる、今日 '99.5.16

人間のくそ、くそ集団
 俺たち寄せ場の人ば、なんのくそか
~~俺~~一般社会の人々は俺たちのこと
 を、このくそやろうという。といったら、おめえたちは
 何者だ！とふれはぬう？しかしヤツらは、
 何も考えられないだろうな、



画・セイトロウ



金はいい、
 女もいない
 なにもない。
 あ、そうだと愛だけは
 誰にもまけないぞ。

'98
 5.31
 吹き出し
 現場で
 1人のセーラーの
 詩

朝太郎の箱船

鈴木克彦作

第一みなさんさようならの巻

一 出帆の章

頭のイカレはチンボのイカレ 心のイカレはマンボのイカレ
イカレタやつは怒り多しにボケ多し イカリ多しは争いごとを引き起こし ボケ多しは軽蔑と尊敬が常につきまとう
そうした者は邪魔なもの 世のよけい者にハジカレ者 ありがたい観音様にニツクキゴロツキ
それでも何んとか生きてゆくためにヤ ケーム所とかセーシン病院とかと言われる建物のオリの中に一人倍の苦勞を重ねねばならぬ
チドングドンのだぐいの者は 人一倍苦痛はないが 心優しき者のもとにいてこそ生きられる
いずれ戦争やバニツク状態 キキンともなればグクツブシの最大代名詞
ある地方ある国じゃ イッペンに抹殺されるともがらだ
そんな者共呼びよせ狩集め アホウ船ならぬ箱船にブチ込んで クンをヒリヒリ船出する
どこへ行っても同じような輩には どこへも行かなくてはならないけれど、どこからも追われる悲しきヤツなら 救ワニヤならんと朝

太郎

そんなタグイの者をカキ集め 船という團いの中に押し込んで キョードー生活とやらを強いるのだ

何んのために生きてきたのやら 何んのために生きておるものやら 生きるシカクがあるかないかなど 本人達にはトータイ分らない
團りの者にはなお分らない
決して世のため人のためならぬ 役立たずの邪魔モノよけいモノ

神のものは神につき返し 我らが魂のふるさと大いなるアクマの元に帰ろうと 船にこざりて船出した

一見人のカッコらはしているが そのひとつひとつをとってながめれば なるほどチンボやマンボをテハジメに

長短太細を問わぬことにすりや 中には欠如している者もいるけれど ケツツやなづきにヘソや腹 何を見るのか何にかぶりつくものか 何を考えるつもりなのか知らないが

頭や目やパクパクしている口までくつついて 一応手足もついているようだ けれどただそれだけで ヒトと呼ぶにはチト早い

ホ乳類であるならば 毛も肉も皮も骨も力オも頭もついている

しかも船には両棲類でも爬虫類でも 魚貝類 コン虫類に至るまでタンとつまっている

だからオリに入れば区別はつかぬ

だが心アシキ船太郎 たとえ脳ミソの代りに牛クソがつまっていたようと空っぽであろうとも 決してクレージをオリには入れぬけれどもそれ自体が大矛盾 何が起るか知れたものじゃない まともにゆくのが万が一にも望めない

何しろ二千五百の世界中のキチガイ方だ 集めるヤツも集るモノも狂っている

さりながら朝太郎はこう信じてる 学生や軍隊生活などによくあることに

イビキの凄い者共より集め イツカ所にイビキをかかせて寝かしておけば みたいな

ビキを止めるというハナシ

もしかしたらうまくゆくかも知れないぞ もっとも殺人暴行を止めさせるだけではできようが 彼らがマトモになることなどは

腹黒い朝太郎ユメツユほどにも願わない 奇人変人こそがマトモと信じて疑わぬ 決してナオスことはない大ハバカリ

雨はふるふる七日降る 何しろ大豪雨と神ナリ様だ

神々の大いなるかなショーペンだ 悲しいというのがあるがたいというべきか 力イビキ以来ののつく雨だ

ASATARO ASATARO ASATARO ASATARO

こんな気違い降りのザマを見た 名だたる
二千五百のクレージー達も 腰をヌカシ
て小便モラス

己の趣味や本職に狂っている時じゃないと
自覚する まずは生きてみようと思える
それほどこに 神のイカリはもの凄い おま
けに風まで吹きまくり 大海原は大嵐
誰も助けるものはない 止めるものはない

三十メートルの大波が白刃をつけて ドン
ドコンドコ押し寄せる

箱船沈めぬために生きぬくために人々は
クレージーとなって働いた

十万吨のクソ船に 二千五百のパカビト
乗せて クソ船沈めやみな沈む てなこ
とにならぬようにと働いた

だが雨は止まらぬ風はおさまらぬ 長い歴
史を人々が 神をオソれずやりつづけた
善行愚行の五千余年に 怒った神の太い
なる小便に外ならぬ

神の怒りの凄まじさ 人々は小さいなる大小
便をチビリもらしつつ 水に浮く木の葉
の如くうたれつ揉まれ揺られて流される
何しろ神の怒りは恐ろしい この地球上の
生き者ゼンブ殺してしまうんだからメチ
ャクチャだ

人間虫のほか 神に衝突くモノなどありは
しないのに 神の一事が万事 モノのつ
いでに殺される 他の動植物こそ哀れな

ものさな

雨はフルフル十日もつづく 町も村も水に
沈んでしまい 高いビルも丘も森も姿を
くらました 世界中が大洪水に沈みゆく
どこへ行っても雨ばかり海ばかり 霧ばか
りに雨雲ばかりに神鳴りバカリ 船の中
はバカばかり

そんな波また波のただ中を 二千五百のク
ソビトのせてボロ船が イミもなくワケ
もなく漂いつづける

所詮 人生にイミもワケもあるものか 人
はただ闇雲にヤミクモに 死ぬまで生き
ているだけだ

その生きてる六十億の者がおぼれ死ぬ 死
ななくていくたばらなくていい 生き
ねばならん貴重な人々が溺れ死に

十万吨のギャベツジ船
くたばりぞこないがくたばらず 死んでも
いいものばかりが生き残り 死にぞこな
いが生きのこる クレージーのみが生き
のこる

この大矛盾をどう思う

この役立たずの者を外の間に投げ出せ そ
こにはナゲキと歯ガミしかない時まで、
言い放題スギ放題カミにののしられた者
のみが助かった

善人も救われるのに悪人をや と言われた
善人と悪人のみが助かった 善人も悪人
も

役立たずには違いないから

だが誰にも真実は分らない 朝太郎も語
らない あるのは木の葉の如く揉まれる
船と船室にうめきよろめく囚人ばかり
高く高くグイグイと持ち上げられて ドッ
パーンと下へ叩き落されて 上下運動に
身も心もヤセ細り 生きてる気持も死ん
でるココチもありやしない

白いアクマか黒いアクマか知らないが 悪
人変人をこれ以上苦しめるアクマより
サッと首をしめて殺してくれる神の方が
よっぽどいいといゆもんだ

こんな非情なことは神のなさる仕打ちじゃ
ない アクマ様の余計な取計らいに違
がないとアリガタガルのがクレージー
まさに事実もその通り

神がなさった無慈悲なおしおきに ジヒ深
いアクマさまが助けを乞うたようだ
こころ辺に浮んでくるのが朝太郎 アクマ
さまと何かあったに違いない もった
い

ぶらずに説き明かそう

悪の権化の朝太郎 周囲の無理解にもめげ
ずヘソを曲げとうし 神に背向いたチホ
ウにアホーにクレージー さらに悪党共
に陰鬱ヤロウらにまで 食と衣を与えつ
づけた三十余年 その悪功德がアクマの
心をゆさぶった

そこでエコひいきとかやらをやらかして
こつそり朝太郎に教え込んだのだった

みなとまち 湊町より

新潟県 新潟市の信濃川が海へ注ぐあたり「湊町」より送る些細な

★今回は「空」ばかりで息がつまりそう号「フーッ

ページン

昔から、妙なところでひかかる。数えとキリがない。

小学生の頃通った塾で行われたアンケートに「親友の名前を書いて下さい」という項目があった。親しい友人を知っておこうという塾側の考えだ、たのだらうか。

しかし「親友」という言葉のこのウサン臭い扱いにとまどい、結局何も書けず提出することになった。「高橋さん」と書いてくれた友人に対して「なんだか気まずかったのだがやはりあれは、どうにもひかかる事であった。」

上前のバイト先でのこと。廊下が汚れるので、飲み物を運ぶ時は受け皿を」という様な注意書きが貼り出された。うーん、これは……と一人、無視していたらとうとう受け皿を配布されてしまった。せうかくの好意……しかし……とにかく何か反応しなければと意を決し「ありがたいが、これは個人の問題であって、会社がやることではないのでは」と自分は使用しない旨を伝えるに行、た。「そんなこと、わざわざ



わざ」と、あきられたり笑われたり。しかし

どうにもひかかる事であ、たのだ、私には。

つまらないひと言、些細な事にひかかる損な性格である。軽やかに受け流せばいいのと思いつ

先日街を歩いていた。ホテルの「空室あり

の看板が目に入った。満室あり、とは言わないなあ」と、ふと考えたすと「なんだか空」と満

の關係が面白くなり、空があるとは、これいかに」と、哲學もどきの時間になってしまった。

……もしかすると、つまらないひと言、些細な事で十分に呆しめる得な性格なのかもしれないなあ……という気がしてきた。

こんな独り言人様の目にさらすなんてええんだろか……とせめて最後に花輪
目の保養……です。

高橋 美香

東京

路上

ふらり

散歩

第11卷

写真・岡田知子

文・笠井和明

「武蔵野」



三年ぶり東京にも大雪が降った。東京の雪は大方すぐに溶けてしまうのであるが、大雪ともなれば除雪が間に合わず、陽の当らぬ場所に雪の塊はいつまでも残る。

三年前と云えば新宿西口地下広場で火事があった年である。あの日、明け方、無言で消火液の水掻きをしているおっちゃん達の背景にもロータリーに残る雪があった。人を殺す程のエネルギーが放出された後の虚空の静寂には、無惨に残る雪がとてもよく似合っていた。今でも忘れられぬ光景である。

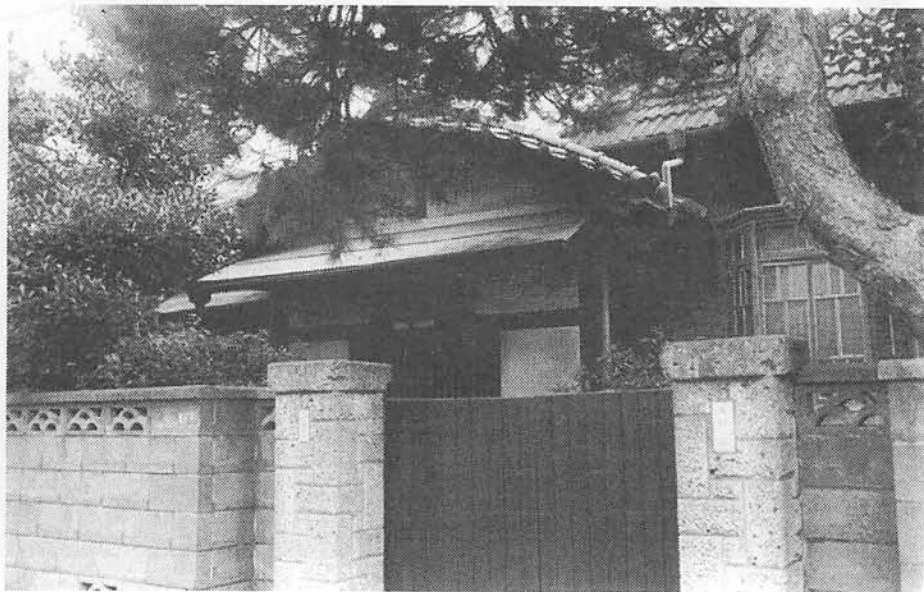
だから、冬と雪は嫌いである。

どんよりとした曇り空、天気予報は夜から雪、そんな恐い日には都心から離れるに越した事はない。新宿から電車に乗り総武線の終点である三鷹の駅を降りる。

明治期の終り頃、「東京は必ず武蔵野から抹殺せねばならぬ。」と書いた国木田独歩が、道を迷う事を苦にせず散策し続けた武蔵野は、今や抹殺されるどころかいかにも東京の一部かのような顔をして平気で市街化を進めている。独歩先生さぞお嘆きになるであろうが、この先生の優れた所は「しかしその市の尽くるところ、すなわち町外れは必ず抹殺してはならぬ。」「武蔵野の味を知るにはその野から富士山、秩父山脈国府台等をながめた考えのみでなく、またその中央に包まれている首府東京をふり顧った考えでなければならぬ。」「武蔵野」岩波文庫より」と、実に未練たらしい点。これが単なる自然主義文学者と違う味わいを醸し出している。だから、落葉林の林が家々に変わろうとも、風がビル風に変わろうとも意外と許してくれそうな気もするのである。

三鷹の駅前はかなり近代化されたとはいえ、やはり、お隣の吉祥寺などと比べるとどこかどん臭い。武蔵野市と三鷹市の違いと言ってしまえばそれまでだが、どこか農家風の面影を垣間見せてくれるのがこういう取り残された町の良い所である。三鷹からの定番の散策コースは玉川上水から井の頭公園となるのであるが、何故か僕らの散策は三鷹の奥にある小さな病院へ。とある九十に手が届く老人のお見舞いである。

何がそうさせたのかはおよそ想像すら出来ぬが、この老人は生き生きとしている。今から九十年前、それこそ独歩が描いた「武蔵野」の時代。「今時分、何しに来ただア」と掛け茶屋の婆さんが叫んだ大地……。同時代を生き抜いた友を想うその目はどこか若々しい。十年二十年が昨日の



事のように、過去など取るに足らぬように、生きることの辛さよりも生きることの不思議さを素直に感じているその目は素敵である。まだまだ修行が足らんと病院を出る。

古い住宅を見付けながら下連雀の街並を歩いていると、太宰治と山崎富江の入水現場に突き当たる。まるで修行が足りないこの作家も武蔵野を愛でた一人である。太宰の時代ともなれば震災、そして戦災後の宅地化が進んだ頃。榊林や畑が次第に一軒家になり、国電の駅前にはバラックの一杯呑み屋が立ち並ぶ頃。臆病であるが故に破滅型の人格は、ヴィヨンの妻に語らせた「人非人でもいいじゃないの。私たちは、生きていさえすればいいのよ」という言葉に恋い焦がれ、そして裏切られる。だからこの地には山本有三のような健全作家の記念館は建てども、太宰はいつまでたっても榊林寺なのである。

文学的興味より建物的興味が勝り、「路傍の石」が正門前に鎮座する山本有三記念館に入る。大正期に建てられた瀟洒な建物としては文化指定らしく立派なのであるが、どうもそこに住んでいた人物と想いが交錯すると面白いもので途端に不愉快になる。こんな家に住みながら、この作家にはどんな葛藤があったのだろうか？

玉川上水沿いの道を東に行けば、すぐそこには井の頭公園の冬の落葉樹林。かつての「武蔵野」の面影は町の外れにしっかりと残されていた。と、言ってもこの公園歴史がわりと深

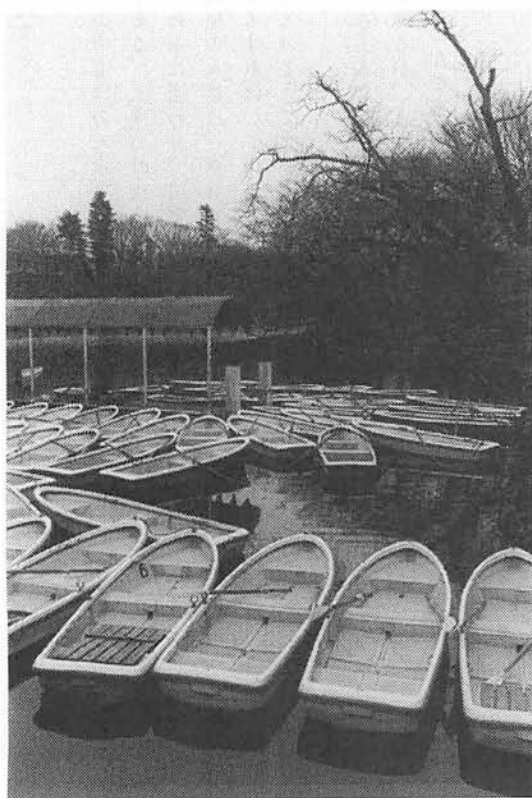




く、將軍の鷹狩り場をそっくりそのまま大正初めに公園に仕立てたもの。上野公園、猿江公園と並ぶ、由緒正しい(?)恩賜公園(単なる払い下げ公園)である。だから「武蔵野」を人為的に残した訳ではなく、偶然この地に残ってしまったという方が正しいのだろう。葉が落ちる所まで落ちた真っ裸な櫓や櫓の木々が無造作に枝を延ばし、その彼方には灰色の空。それは決して自然美ではない。澄み乾いた空気が通りの車の単調な騒音を運び、吉祥寺の人のざわめきを運ぶ。そこに去来するのはどうしようもない淋しき想いばかり。冬の東京をそこから顧みても、何もかもが同じ。人はどこに生されば良いのか?

御殿山を下り、井の頭池に向う。井戸の残る茶屋の脇を通り、池の上に浮ぶ弁財天から井の頭の池を臨む。噴水の水しぶきの波に鴨が揺れる。池周辺とものなれば「武蔵野」らしさはめっきりと薄れ、近隣に住む住民の犬の社交場とさらびやかな服を着たアベックや若者で賑わう行楽地。七井橋を渡れば、近頃有名な、お役所への届け出もしない本当のフリーマーケット。野外ステージ前では踊りやら、演劇やらに興じる若者達。

井の頭公園を抜け、さらびやかで雑然とした自由な街、吉祥寺に出る。狭い駅前には車が走り、人が歩き、雑居ビルが立ち並ぶ。北口の一等地には戦後のどさくさで地権が複雑化した路地が今も





残り、ビルの谷間の空き地には落書きの跡。これも自由の印なのかも知れぬ。それにしても人の波。武蔵野随一の繁華街だけあってこれも致し方がないのか。かつての「ジョージ」はもって気楽に羽を延ばせる街であったのに。若者文化すら商品化する東京は、都市も駄目にしだし、若者も駄目にした。「親がなくとも子は育つ」ではなく檀一雄が言ったように「親がなければ子は育つ」のである。

武蔵野八幡宮で願掛けをし、進路は北へ。独歩の武蔵野散歩道「どの道でも足の向く方へゆけば必ずそこに見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある」よろしく、善福寺公園を目指していたはずが、杉並区には行けずに練馬区の方にいつの間にか迷っていた。

石神井川や千川上水の水源により、江戸城下の近郊農村地帯として栄えた練馬も今や宅地化がどんどんと進む。うど栽培で有名な関町近辺でも畑地はだいぶ少なくなった。それでも新旧入り交じる住宅の中にぼつん、ぼつんと畑地が残っていたりする。

「武蔵野」の林の美は自然のままの森林の美ではなく、人々の生活との共生の産物であり、それが故に独特の風情を醸し出す。東京の畑地が絶滅し始めているのであれば、宅地という生活の場での共生を図るのが本来なのであるが、宅地化は林も一緒に伐採してしまうのが困った点である。吉祥寺通り沿いの、とある廃虚化した一軒家は雑木に被われていた。不法産廃の集積場と化した一軒家もあった。ゴミ箱と化したポストもあった。朽ちない現代の遺跡は、





歪んだ生活の怨霊のようで、「武蔵野」の地には似合わない。

錆びれた裏町のような武蔵関駅前を抜け、石神井台に入る。武蔵野台地の肥沃な痕跡は台地の上に広がる広大な畑地。昔ながらの農家は見当たらない、けれど霜の音がサクサクと鳴るような閑東ロームの台地を見れば、本当、東京を抹殺したくなる。横に広がる空間は、杭打ち前の工事現場以外もはや都心にはない。それだけでも貴重である。

畑地を抜け、「憩いの森」なる小さな雑木林が残されただけの広場を見、富士街道に出る。江戸町民が富士山詣でに賑わったかつての大山道も、今やその面影すらない。ただの狭い国道。排気ガスが鼻につくので、旧早稲田通りに入る。昔ながらの農家が頑固に残り、静かな街並には駐車場には子供が作ったのだろう、かまぐらの跡。かと思うと突然豪華な一軒家。街道筋は今でも人々の生活の迷路園のようなものである。「一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈しおる場処を描写することが、すこぶる自分の詩興を喚び起こすも妙ではないか。」（「武蔵野」より）と、独歩先生、本当に分ってらっしゃる。

石神井公園の三宝寺池へ出る。井の頭公園がどこか都会風に整理された面持ちを見せるのと対照的に石神井公園はこの三宝寺池あたりを中心に自然のままの荒々しい姿である。太田道灌に亡ぼされた豊島氏の石神井城跡を有する石神井公園はもちろん恩賜公園ではない。あまりにも豊島一族の怨霊話が多いので、放ったらかしにさ





れて来たという感じである。池には氷りが張り、鴨がその上をよちよちと歩く。池を守るよう思うまま枝を延ばし春を待つ樹木。時の静寂がどれだけ大切なのが分かる。

九十年生きたとしても、人はそれでも明日を夢見る。そこには何一つ分かり過ぎることがない。分らない事が恥ずかしい事でもない。何をしたとしても、しなくてもいつも後悔するのが人生ならば、そんな人生ももしかしたら良いのかも知れない。時が経ても変わらないものは、人々がそこで慎ましく生活してきたという足跡。その足跡は誰でも残せる。そして誰でも残せるが故に真実なのである。

人々の悲痛さを癒してくれる場所はどこ時代にもあっただろう。その場所さえ見失わない限りどんなに辛かろうと時が呑み込んでくれる。

石神井公園駅から池袋駅に着く頃には都心にも雪が散らつき始めた。雪はまだ結晶が弱く、雨に変わったり、雪になったりと自分の姿がなかなか定まらない。悩み、悩み、躊躇せよ、どれだけお前のせいで辛い目にあう人々がいると思うのか、と念じてみてもそれだけは通じない。酔いが進むのと同時に窓の外の雪は本格化し、街は瞬く間に冷たい色に包まれていた。

三年前のあの朝、薄着のまま飛び出し消火活動を呆然とした眼差しでぶるぶる震えながら見詰めていたおっちゃんの姿が目に見え。

自主退去を決め、無我夢中の一週間が過ぎた頃、無惨な雪跡を被い隠すように、また大雪が降った。あの年は多くのおっちゃん雪景色の中、凍死した。

体を火照らしたまま雪の新宿へと向う。こうやっていつもいつも現実引き戻される。逃げ出そうと思っても、逃げ足の遅い人はなかなか逃げられないものである。

堂々巡りもまあ、良いのかも知れない。後悔もまあ、良いのかも知れない。

人々の生活の足跡の中、今も残る僅かな「武蔵野」は妙に人に優しい。

(了)

「アイルランドからの手紙」

2001.1.24

こんにちはー お元気でしょうか？新宿のみんなは元気？私はのんびりふらふらアイルランドを旅しているよ。毎日いろんなこと考えつつ。（日本の事を考えたり、アイルランドの人達や各国の人と逢って話して考えたり）

今は、西にある小さな島イニシュマーン島に来てる。夏は観光客で賑わうみたいだけど、今は、閑散としていてオフシーズンの方が本来のその土地の様子がわかる気がして良いよ。毎日、本当にめまぐるしく天気が変わり、昨日は大シケで、ものすごい高波や強風、雨で、又、本島に戻れるのか心配だったけれど、今日は、良い天気（といっても雨も降った）で断崖にぶちあたる大西洋を見て「地球ってスゴイ！」←大げさじゃなく、島で、回りが海だと本当に地球を感じるんだよ。

アイルランドは土地が全体的にやせているため、ヨーロッパの中でも貧しい国にはいるらしい。EUの融資でかなりうるおってきているけれど、皆この国の将来を心配しているし、イギリスやアメリカにかなりの人が出稼ぎに行っている。そして若者の自殺率が高く（若者の仕事がない）若者のホームレスが多いんだって。私も首都ダブリンで若いホームレスを何人か見かけた。老人ホームレスにはシェルターがあるけれど、若者はいれず無策だそうで。福祉も日本の方が恵まれている様子。この島も、若者の都市への流出で年配者が多く、土地は石だらけ。まるで月面のようなだよ。そんな厳しい自然環境の中で、たくましく生きる人達に魅かれる。

外に出れば、中のことが見えるもので、日本の伝統文化の奥の深さを改めて感じて。欧米人がアジア文化に魅かれるのが、ここに来てよくわかる。自国の文化を大切にしたいと改めて思った。アイルランドも独自の文化、独自の言語があるけれど強国イギリスによって、失なわれつつある。「英語」の持つパワーの恐ろしさ…結局強国の文化が無遠慮に小国にはいつてきちゃうもんね。

今、宿でこれを書いているんだけど、又、外の手が荒れ狂っている様子で雨を風が家にぶつかっている。明日この島を笑つけれど果たして船が出るかどうか…

日本もアイルランドも似たような問題を抱えていて、移民の問題やゴミ問題などなど、どこの国も大変だ！

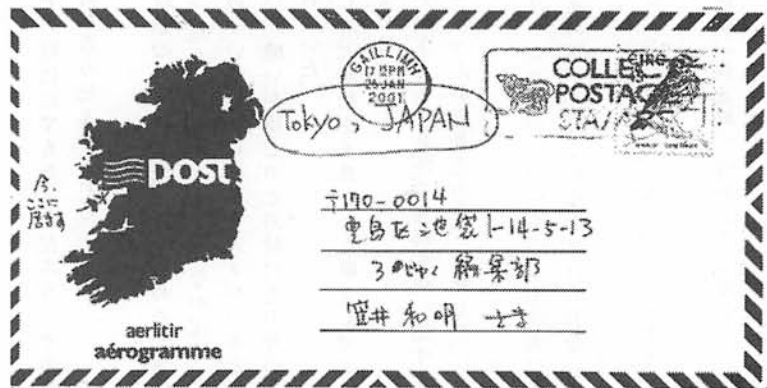
そうそう、アイルランドはパブの国！ギネスビール（めちゃくちゃおいしい！）を片手に、昼間から（昼は食事やお茶ものめるので子供も来る）わいわいがやがや低料金でずーっと暖炉の近くに居られて、しかも時にはアイリッシュ音楽付き。パブをそのまま日本へ持ち帰りたいよ！建物も古くてすごい落ち着くよ。

旅の醍醐味はやはり土地の人と話すこと。つたない英語を駆使して、近くの人をつかまえて？話を聞いている。各国の観光客と、お互いの国の情報交換をするのも楽しい。人に疲れることも多いけれど、やっぱり人は人を求めてしまうんだろうね。

帰国したら、又、やりたいこともできたよ。まあとりあえ和民で和食メニューが食べたい！！

元気で！2月中旬に帰るのでその時又！

おんた



お寒い毎日です。
みなさんどうお過ごしなのかと思います。
本当に死ぬ程寒い思いをされているのだ
ろうと思います。

先日「東京会」という集まりがあり行つて参りました。(私は北海道より三年前に横浜に老いた親がいるため引越してきた)それぞれ年金者になりいろいろな生活の老人の集りのようなものでしたがみごとな生活ぶりの友人・知人もおりました。

生活の叡智など全く感じることもなく感性もなくなったただ衣類宝石等はみごとなものをも身につけその場限りと思い乍ら、私自身もシワクチャの顔に笑いをうかべ、きりぬけて帰りましたが世の中の矛盾にいかり（昔ならかつかといかりまくりましたが）というより苦笑を感じ電車にのりこんだあとは何かしらわびしきみたいな感情だけが残りました。

普段ならまず聴くこともない、マラーやショスタコヴィチのCDをがんがんかけましたがこれもつまらぬ抵抗の一つかなと思ひ乍ら改めて自分の年を考えさせられた。

つまらぬ衣類等ありますがやはり車がな
いと…宅急便で送ろうと思いつつ一年近く

12月の「ろじゆく」届きました。ありがとうございます。父の葬儀以来どうも調子がすっきりしません。向寒の折 本当に身体に気をつけて…

Tさん
(横浜市在住)

「ろじゆく」受けとりま
した。のせてもらいありが
とうございました。

歌や句は、「なかま」や山谷句会でおぼえたのです。「ろじゅく」の作品は、実は少し難しいのですが、何回か読みかえすと、みんな頑張っているようすがわかり、自分のはげみになります。

雪や病気であぶれること
もあり、いつそちらでお世
話になるかわかりません。
幸い今は親方に気にいって
もらい、また親方も面どう
見のいい人なので、心配い
らず働いています。

寒い日が続き、路上のなかまも心配です。「ろじゅく」の皆様のおからだお気を付けてくださるようお願い申し上げます。

一月二十七日夜

いわせまさと（群馬県在住）



田、豆、麦、稻

おめでとう
今年もよろしく
おねがい

新子巳午祈祝す
旧年中は所々諸にありうた
本年もよろしく
路上又云流の益々ニ発展を
そ期す
健康を
弘長

終

富士森さんより

はり師いが丸の 肝心かなめ

はり師 いが丸

東京も今年は寒く、一週間前の雪もまだ溶けきらない。それでも透きとおる冬の空を見上げると、細く鋭い桜の枝の節々にはつばみがぎゅっと宿っている。厳しい冬の中にも、一寸先の春が見える。

2月ともなれば、ミレニアムやら21世紀の幕開け等々、大仰な表現も聞かなくなってくる。2001年初の露宿。新春のテレビや新聞じゃないので、「21世紀はどんな世紀になるでしょう」なんて話はしない。私にできることは、まずこの一年を、せいぜい最初の十年を、ひとつひとつの出逢いを刻みながら、時には足踏みしつつ、歩んでいくことだろう。

新宿での鍼灸治療ももうすぐ丸3年になる。初めてお店を開いた頃は見知った仲間が気を遣ってくれるかのように患者になってくれ、ものめずらしさに取り囲んでいる人のほうが多かったが、今ではワタシの利用の仕方を覚えた患者さんが、腰痛のみならず、いろいろな悩みをもった身体を預けに来てくれる。続けることの大切さを私もひしひしと感じている。

毎日が本番である。人はまずいラーメン屋には二度と入らない。無惨なアタマにされた理髪店には恨みさえもつ。たとえタダであっても、一度納得のいく治療を施されなかった患者が、同じ治療家の元へ治療を受けに来ることはあり得ない。手が雄弁なのである。患者のあらゆる情報を引き出そうとする手は、実はそれ以上にこちらの情態を受け手に伝えるのだ。触れ合う手と肌によって、こちらの自信の程や集中力も患者には恐ろしいほどに伝わってしまう。どれだけ反省をし勉強しようとも、一度離れた人に名誉挽回する機会などありえないのが常である。結果を出せた人からの信頼と、出せなかった人たちの視線を胸に刻みながら、顔をあげて向き合えるだけの努力をするしかない。何の権力も持たず、時には医療ともみなされず、医療界の最下層に位置する鍼灸師の存在価値は、患者の要求を満たすこと＝症状をとること以外にない。そしてそのことが、路上ではおおいなる武器になるという確信は揺るがない。あとは私が成長するのみである。

こんなたいそうなことを書くのは、昨年、この国の、この社会の、人と向き合おうとしないあらゆる者を呪い、私自身、最後のひとりになっても向き合っていこうという覚悟が漸くできたからだ。

1990年代、歴史はつくっていくものだというのを、身を持って教えてくれた路上の仲間と共に、新しい世紀の初めと一緒につくっていく所存です。露宿に集うひとりの仲間として、今年もよろしくお願いします。

乞う愛読者、投稿者！

「露宿」は路上から文化を発する貧しき人々の表現雑誌です。

路上生活者は炊出しを食っているだけじゃない。日雇労働者はスコップを握ってるだけじゃない。生活保護世帯は肩身の狭い思いをして暮しているだけじゃない。与え、与えられるのが人との関係なのだから、偏見に貫かれた俺らの世界を俺らは俺らの言葉で解きあかそう。告発でも良い。苦悩でも良い。懺悔でも良い。決して同じ人が一人たりともいない俺らの世界を無数の作品群で表現しよう。「露宿」は投稿者が必死に書いた作品を、旨かろうが下手だろうが必ず掲載します。一人ひとりの表現を何よりも大事にします。ペンと紙がなければお渡しします。口述筆記も請け負います。来れ路上の表現者！そして、あらゆる路上から「露宿」をばらまこう！

次号12号は4月25日発行予定です。

原稿締め切りは3月31日必着にてお願いします。

〔露宿定期購読の御案内〕

路上文芸総合雑誌「露宿」はもちろん全国の本屋では売っていません。毎号確実に読者のお手元に届けるために当方では定期購読を承っております。

定期購読8回分 5000円（郵送費込み）

定期購読4回分 2500円（郵送費込み）

一回ごとの購入でも大歓迎。一冊送料込みで660円となります。その場合は御面倒でも継続購読を連絡して下さい。

申し込み方法

郵便振替用紙（00160-6-190947ろじゅく編集室）に定期購読もしくは継続購読とお書きになり、住所、氏名を明記の上送金して下さい（発行ごとに郵送します）。尚、郵便振替の他、切手での受け付けもしております。FAX、メールにても注文承り中。

まとめ買いはお安くなります。

2冊以上は送料無料、5冊2000円、10冊3500円、50冊15000円（いずれも送料込み）となります。

編集後記

肩こりて 首をまわせば コキッゴキと

響く冬の夜 春よ、はよ来い

最近、肩こりが激しい。原因は、パソコンに向う毎晩の編集作業？厚いコートの重さ？なにせ悩み多き年頃、重い荷物を背負って日々生きてる訳だ。灰色の街を眺め、ふとため息をつく。しかし、「春よ来い」よりは、「貼れよ、ビップエレキバン」って感じ。助けてーいが丸さん。気づけば、編集を始めて早一年。春が待ち遠しいと去年も書いたな。（お）

露宿ペン倶楽部短信

執筆者の皆さん、遅ればせながら明けましておめでとうございます。

今回いつもより執筆陣が少なく、論争も収拾した感があるのも、寒くて筆が動かぬせいだろうか。これから日を追うごとに春が近付きますので、みなさんどんどん良い作品を送り、どんどん議論を深めていきましょう。そんな中、山谷の鈴木さんが力作二編も送ってくれました。「朝太郎の箱船」シリーズ今後も期待しています。

露宿バックナンバー

在庫一掃セールを始めました

露宿バックナンバーは創刊号、3号、5号、6号、7号、8号、9号、10号の在庫があります（2号、4号は売切です）。限定1000部発行の印刷物ですのでお求めはお早めに。今月からバックナンバーに限り1冊300円（3冊以上は送料無料）での一掃セールを始めました。お求めはろじゅく編集室まで、郵便振替用紙、FAX、TEL、メールなどでご注文下さい。（尚、在庫が切れた場合はご容赦下さい）。

Rojuku

定期購読大募集

♪露宿を置いて下さるお店・スペースを探しています。お気持ちのある方はぜひご連絡下さい。まとめ買いの場合は、とてもお安くなります。

♪露宿では広告を募集しています。又、投稿お便り、大歓迎です。下記住所のほか、「ろじゅく編集室専用ファックス」03-3981-6746がございます。「露宿」の注文・原稿送付・広告申込・お便り等、何にでもお気軽にご利用下さい。

「ろじゅく」

この雑誌は、路上生活者の方達が読み、書き、表現をする場を提供する為、つくられました。一冊でも多く雑誌を印刷し、路上生活者の方に手渡したいと思い、利益が出れば炊き出しのお米代にしたい為、心苦しい限りですが、多くの方のご理解とご支援をお願い致します。皆さんのお気持ちに届く、熱く丁寧な雑誌づくりを目指します。

購読費・スポンサー費送り先
郵便振替口座

00160-6-190947

「ろじゅく編集室」

露宿 ROJUKUはココで買えます。

◆模索舎 東京都新宿区2-4-9 TEL/FAX 03-3352-3557 ◆TACO ché 東京都中野区中野5-5-2-15中野ブロードウェイ 3階 TEL 03-5343-3010 FAX 03-5343-4010 ◆スペースかぼす 東京都新宿区大京町3新大京マンション304号 TEL 03-5367-5666 ◆新宿中央公園ポケットパーク (毎日曜午後6時から8時まで) TEL 090-3818-3450 ◆城西教会 東京都渋谷区西原1-19-3 TEL 03-3466-0445 ◆山谷労働者福祉会館 東京都台東区日本堤1-25-11 TEL/FAX 03-3876-7073 ◆石手寺 愛媛県松山市石手2-9-21 TEL 089-977-0870 ◆ぐりん・びいす 宮城県仙台市青葉区立町18-12-104 TEL/FAX 022-213-6739

路上文芸総合雑誌「露宿 (ROJUKU)」第11号 2001年2月25日発行 (隔月刊)

主宰・笠井和明 編集/発行・ろじゅく編集室 〒170-0014 東京都豊島区池袋 1-14-5-13
TEL/FAX 03-3981-6746/090-3818-3450 (笠井)

Eメール・rojuku@d9.dion.ne.jp URL・http://www.d9.dion.ne.jp/~rojuku/

郵便振替口座 00160-6-190947 加入者名「ろじゅく編集室」

販売協力・新宿連絡会、露宿ペン倶楽部

印刷・株式会社ラジオグラフィー